

親鸞仏教センター通信

 2010.
March

第33号

2010年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

 ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

如来より賜りたる「信」

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕

私たちの暮らしている世界が、数多くの不確かなこと、疑いを完全に払拭しきれない事柄に取り巻かれていることに異論を挟む人は、ほとんどいないと思われる。しかし、そうした不確かさや疑念のためにいちいち逡巡^{しゆんじゆん}しては、日々の生活は成り立たない。そのため、私たちは「信ずる」という行為を通じて、日常の底に横たわる不信や疑念を、その都度、飛び越え克服しようとする。「信ずる」ということは、その意味で、誰しもにとってごく身近な行為と言える。

宗教において「信」は、それを特徴づける重要な要素であることは言うまでもない。つとに、哲学者パスカルは、「信」にどこか「賭け」的な要素が孕^{はら}まれていることを指摘している。実際、現代人の多くは、何かしら人智・理性を超えた「得体の知れないもの」に、一種の「賭け」のごとく信ずることで己の存在を委ねるのが、「宗教」における「信」の特色であるかのようになっているのではないか。だとすれば、現代の日本に、「無宗教」であることを、むしろ誇らしげに自任する人が後を絶たないのも無理はない。「無宗教」をもって任ずる人の多くは、何人も人智を超えたわけのわからない、「得体の知れないもの」に自己の全存在を委ねずとも、日常生活を平穩無事に送っていくのに何の支障もないと思っており、神でも仏^{ぶつ}でも、およそ宗教を信じる人たちは、よほど人生に生き詰まり、わけのわからないものにもでも縋^{すが}らなければ生きていけないような心の弱い人間であると感じているに違いないのである。

なるほど、「信じる」という行為には、大概の場合、そこに「賭け」的な要素の見いだされることは事実であろう。だが、宗教を特徴づけるところの「信」、少なくとも真宗における「信」においては、「賭け」的な要素の入り込む余地は一切ないと断言してよい。まさにその点において、宗教における「信」（とりわけ真宗の「信」）は、通常一般の「信」とは厳密に区別されねばならない。真宗では「機の深信」ということが言われる。これなどは、信じる主体であるところの「機」、すなわち「自己」が否定されきったところに成り立つ「信」にほかならない。この「信」にあっては、「あれか、これか」に迷い、賭けることのできる能力をもつ「私」の能力そのものが、完全に否定されているのである。

自力を完全に否定するということは、言い換えれば、自己をゼロ位に置くということでもある。『高僧和讃』に「かならず煩惱のこおりとけ、すなわち菩提^{ぼだい}のみずとなる」（『真宗聖典』493頁、東本願寺出版部）という言葉があるが、「自力無功」（清沢満之）を信じるとは、まさにこのことであろう。氷が融けて水になるには、必ず0度を通過しなければならないように、この「信」と救いの間に、一切飛躍はない。

私たちが「信ずる」ということを、「賭け」のように考えているうちは、真宗の教える真の救いに与^{あずか}ることは、とてもできそうにない。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑬

大涅槃を証する

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第29回、30回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第29回では、「第十四願」について、第30回では、「第十五願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第26回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 願力の回向に藉る

本願の第十一願は、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』17頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と誓われている。この第十一願を、親鸞聖人は、『教行信証』の「証卷」の課題にしております。この第十一願をあげて、その隣に、『大無量寿経』の異訳の經典『無量寿如来会』の第十一願文を並べています。そこでは「もし我成就せんに、国の中の有情、もし決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずは、菩提を取らじ」（『聖典』281頁）と。「定聚」が「等正覚」に置き換えられ、「滅度」が「大涅槃」となっていることに親鸞は注意した。定聚に住することとは、等正覚を成ることだと。等正覚というのは、正覚、無上の覚りと等しい。いつでも仏に成れる、その一步手前というような位を表す。だから、この位は、弥勒菩薩の位だと言われる。弥勒菩薩は、いつでも仏に成れるのだけれど、あえて一步とどまって衆生を救う仕事

をする。これもやっかいな話ですけども、仏に成ってしまうと、本当に衆生の救いはできないのだと、こう大乘仏教は言うのです。

「証卷」の初めに、親鸞は「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の教に入るなり」（『聖典』280頁）と。即時に正定聚の位を得ると。それが本願が誓う浄土の利益です。「即」という字、これは、大乘仏教の論理展開の大切な言葉です。即とは時を隔てないことだと親鸞は注釈する。場所も、時間も、ちょっと待ってという話ではない。今、ここでということです。

そこに、「往相回向の心行を獲れば」ということを挟んでいますでしょう。これが親鸞聖人の大切な押えなのです。つまり信心ということとは、願力回向の信心である。「証卷」を結ぶようにして親鸞が書いている言葉は、「大涅槃を証することは、願力の回向に藉りてなり」（『聖典』298頁）と。涅槃とは、仏教を仏教たらしめる大事な標識。仏陀が苦悩を本当に超える、それが衆生をたすけるということだというときに、大涅槃に、われひと共にふれていく以外にない。そういう課題が第十一願で出てきているわけですが、大涅槃を証するという、この仏教の大目標は、願力の回向に藉ると。この「藉」という字は、借りるという意味ももっている。「本願力の回向」という言葉が『浄土論』（『聖典』145頁）にあるわけですが、回向自身が本願力に藉る。つまり、われわれの回向ではない。われわれが何かに振り向けようとしてやる、われわれの意思の行為ではなくて、われわ

れに呼びかける大きなはたらき。本願力回向ということは、本願のはたらきが人間にまで来ると。無限なるものが、有限の中に入って有限を気づかせる。そういうふうに関親鸞という人は、回向という言葉で領解された。

■ わからない本願力

われわれは自分の力とか、自分の意思とかはわかるけれども、本願力というのは、まったくわからないというのが一つの壁なのです。親鸞にとっては、われわれがわかるような心やら意思は全部虚偽だと。人間存在の根本が、煩惱と共に生きているのだから、そこに起こる意欲やら意思、全部が本当のものではないと自覚表現されるわけです。そういうことを気づかせるはたらきが本願力だと。自分は正しいのだ、自分は自分でやれるのだという思いでわれわれは生きていますから、その限りでは、本願も本願力もまったく見当がつかない。いくら外に探してみても、手に入るものではない。太陽があったり、地球があったりするようには本願があるわけではない。説明してわかるものでもない。説明してわかるようなものであったら、仏教の教えの言葉にならないのです。念仏はなぜ浄土に生まれる種か。本願がそう誓っているからだ。本願とは何だと。何だといってもわからない。信ずるほかない。信ずるほかないということは、自分の虚偽を外から照らす光の如くに、闇に差ししてくるという形で言葉が立てられている。自分がそれによって照らされてみて、そういうはたらきが真実なのだと信ずる。

「大涅槃を証する」という大テーマ、人間にとっての課題は、本願力の回向に藉るのだ。つまり有限なる人間が、自分から求めて得るという発想であったものが、^{ひるがえ}翻されて、完全に大なるはたらきが照らし出す闇の場になる。能動形で考えていた考えがひっくり返されて、自分という存在が受身形になって、真実のはたらきに照らされる場となる。そういうことによって、大涅槃を証するという課題が、人間のものになる。

■ 迷いを平気で生きられる位

「極楽」というけれど、涅槃だ。涅槃の楽を極楽と表現する。涅槃とは何だ。涅槃というのがわからないのです。法蔵菩薩は、四十八願を通して涅槃を莊嚴する。涅槃とは、いうなら四十八願のようなものと提出するわけです。

正定聚ということは、大涅槃を必定する位です。必定するということは、無限に歩む位です。課題とぶつかりながら無限に悩む位と言ってもよい。悩みを恐れない位と言ってもよい。そういう立場を開いて、そこに腰が据わるのが正定聚。だから、親鸞聖人にとっては、「現生」に「正定聚に入る」と言う（『聖典』240頁）必然性があるわけです。現生は苦悩の場、悩みの場。でもそこにこそ本願の救いが来るのだ。そこに腰を据えて、煩惱の闇を生きるのだ。苦悩の命を生きることと本願の救いとは別ではない。こういう救いが、回向成就の信心の救いです。これはすごいことです。それが大乘仏教の救いだ、ということをはっきりさせた。

無上涅槃には、信心をいただければ必ず至る。必ず至る位とは、どういう位かと言えば、迷いを平気で生きられる位。そういうことが成り立つのが、我ら煩惱成就の凡夫における「不断煩惱得涅槃」（『聖典』464頁）の救いだ、と言えるのではないかと思います。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年3月9日（火）午後6時30分～9時

4月 休 会

5月7日（金）午後6時30分～9時

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

— 現代と親鸞の研究会・第33回 —

現代社会と森田療法

— 現代人の苦悩の理解とその解決を目指して —

森田療法研究所所長 北 西 憲 二



北西憲二氏

2009年9月4日、東京ガーデンパレス（文京区）において、森田療法研究所所長の北西憲二氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。現代社会の人々の心の問題といかに向き合うかということに、森田療法という東洋の人間理解に根ざした精神医療の立場から活動を続けておられる北西氏に「現代社会と森田療法—現代人の苦悩の理解とその解決を目指して—」というテーマで語っていただいた。ここでは、その一部を紹介する。

（囑託研究員 春近 敬）

■ 森田療法とは

森田療法とは、森田^{まさたけ}正馬（1874-1938）によって生み出された日本の伝統的な精神療法です。森田は、東洋的な人間理解をベースに、西洋の医学的なモデルを統合させることで森田療法を確立させました。かつては数ヵ月間の入院治療が原則でしたが、現在は外来療法を中心に、日記・通信療法、自助グループへの参加などを組み合わせた治療を行っています。

■ 苦悩に向き合うということ

1980年に、アメリカで神経症の診断基準が発表されました。それまでは、神経症は一般に心理的な病気であり、さまざまな環境的な要因も絡んでいると考えられていたのですが、そのような考え方は解体され、脳の機能障害という生物学的な問題として主張されるようになりました。そして、それとほぼ平行するかたちで薬物

療法が行われてきました。

このような流れは、過度の医療化へと方向付けることになります。人との関係で苦しんでいる人、ちょっとしたことで落ち込む人、心の傷を負った人、ストレスで心身に不調を来しているような人たちすべてに診断がつくようになってきています。私たちが人生を生きていくうえで向き合わざるを得ない当然の苦悩というべきものと、どこで線引きができるのかということについて明確な議論のないまま、医療の枠組みが広がり続けているのです。生きていくうえでの苦悩というものは、その人の特性ともいえる面もあるのではないのでしょうか。しかし、この流れではすべての苦悩はマイナスなものとされ、取り除かなければならないものとされます。たとえば、内向的な人は社交的でアクティブでなければならない、という発想になるのです。そして、その劣等感から自分は薬を飲まなければならないのだ、という方向に至るわけです。

人間の苦悩というものは、遠ざければ遠ざけるほど長く続き、いつまでもそこから逃れられないものです。悩みがあって薬を飲み、今度は別の悩みが出てきてまた薬を飲むという、終わりのない循環です。そうではなく、そのような苦悩の経験は避けがたいものであると観念することによって、また違った苦悩との関わり方が現れてくるのではないのでしょうか。必ずしも薬に頼るという方向ではなく、自分自身で治していく力をもう少し信頼したりするような考え方や関わり方が、このような時代だからこそ重要ではないかと思います。

■「あるがまま」の生き方

西洋の精神療法は、認識の変化を通して不安や情緒をコントロールしようとする考え方です。西洋では、不安なことや不快なことは基本的には「あってはならないもの」と見なされます。今や、日本でもそうなりつつあります。本来、人間に当然のようにあるものを「あってはならないもの」として認識し、取り除こうとするところにその人の苦悩があるのです。森岡正博（大阪府立大学教授）さんが、現代社会は「無痛文明」だと言っておられますが、出口のない苦悩にいちばん陥りやすいのは、まさにそうした無痛の生き方をしたい、つまり自己中心的に全ての物事を思いどおりにしたいという思想の矛盾に悩んでいる人たちなのです。

これに対して、森田療法では、不安や情緒をありのままに受け入れていくことからもたらされる認識の変化を重要視します。原因を探求してそれを取り除こうとするのではなく、関係性から見ていくことで明らかにしていきます。そして、自然に任せた回復ということに重きを置きます。認識の変化自体はどちらにおいても起るのですが、その方向性はまったく異なるものです。

こういった考え方の根っこには、「自然」という考え方があります。悩む人は、自分が欲するままにならないことで悩みます。自らの思うようにならないから苦しみます。思うがままにならないことを、思うようにしようとする生き方が「我執」であって、それがまさに自己愛のあり方なのです。ですから自然と対比することで、自己愛に基づく自己万能感の限界を知るのです。たとえば、老、病、死といったことは確かに生きるにあたっての苦悩かも知れませんが、これはもう私たちにとってどうしようもないことです。どうしようもないことであれば、受け入れるしかない。そのためには、自分の限界を知るしかない。確かに怖いものは怖い。これは事実です。そういう自然な感情に対して、私たちはどうすることもできません。しかし、そういった諦めからそれを受け入れるという展

開が起こったとき、生きる欲望が湧いてくるのだ、と森田は言います。この欲望を私たちは諦めることはできません。そういう意味で、私たちの欲望には底がないのです。森田は、その欲望によって生きれば良いと言うのです。森田療法は、単に諦めという精神療法ではありません。本当の意味での「諦め」、つまり物事の有り様を「明らめ」ていって、その事実を受け入れたとき、そこに新しい生き方が見えてくるのです。これを私は「あるがまま」ということだと理解しています。（文責：親鸞仏教センター）

※北西憲二氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第20号（2010年6月1日号）に掲載予定です。

北西 憲二（きたにし けんじ）森田療法研究所所長、日本女子大学人間社会学部教授

1946年、埼玉県に生まれる。東京慈恵会医科大学卒業。72年、スイス・バーゼル大学精神科・うつ病研究部門に留学。79年、東京慈恵会医科大学第三分院精神科にて、森田療法の実践と研究に従事、のち科長。同大学精神神経科助教授も兼任。96年、成増厚生病院診療部長、副院長を経て、森田療法研究所を開設。医学博士。森田療法学会理事長。集団精神療法学会常任理事。森田療法学会認定医。

著書に『くよくよするな』といわれても…くよくよししてしまう人のために、『軽度・神経症を治す一考え方』、『我執の病理—森田療法による「生きること」の探求』、『森田療法で読むパニック障害—その理解と直し方』、『以上白楊社』、『実践森田療法—悩みを活かす生き方』、『親子療法—引きこもりを救う』、『中年期うつと森田療法』、『森田療法のすべてがわかる本』、『以上講談社』、『森田療法と精神分析的精神療法』、『誠信書房』など多数。

なお、『anjali』第19号（2010年6月1日号）にご執筆の予定をいただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

り。「念我」ともうすは、ちかひのみなを憶念せよとなり。諸仏^{しよぶつ}称名^{しょうめい}の悲願^{ひがん}にあらわせり。憶念^{おくねん}は、信心をえたるひとは、うたがいなきゆえに、本願をつねにおもひいずるころのたえぬをいうなり。「総^{そう}迎^{よう}来^{らい}」というは、「総^{そう}」は、ふさねてという、すべて、みなというころなり。「迎^{よう}」は、むかうという、まつという。他力^{たうりき}をあらわすころなり。「来^{らい}」は、かえるという、きたらしむという。法性^{ほうしやう}のみやこへ、むかえて、きたらしめ、かえらしむという。法性^{ほうしやう}のみやこより、衆生利益^{しゆじやうりやく}のために、この娑婆界^{しやばかい}にきたるゆえに、「来^{らい}」をきたるというなり。法性のさとりをひらくゆえに、「来^{らい}」をかけるというなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五〇～五五一頁)

語 註

①「聞」「聞」について、親鸞は次のように記している。

「経」に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を開きて疑心あることなし。これを「聞」というなり。

(「教行信証(信巻)」(『真宗聖典』二四〇頁))

②「諸仏称名の悲願」『大無量寿経』に説かれる四十八願の中の第十七願、「たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。」(『真宗聖典』一八頁)を指す。親鸞においては、願文を番号で記すことは稀であり、御消息(門弟等に宛てた手紙)の類を除き、著作には殆ど願名で記す。

試訳をめぐって

【原文】「聞名念我」というは、「聞」は、きくという。信心をあらわす御のりなり。

【現代語訳】「聞名念我」の「聞」は、きくという。それは本願の教えを聞き抜いて、自力を頼みにする疑いのころが晴れていくこと、すなわち、信心をあらわす言葉である。

仏が生きとし生けるすべてのものを救いたいという誓いをおこされたさまは、この『唯信鈔』に詳しくあらわされている。「聞名念我」の「聞」は、きくという。それは本願の教えを聞き抜いて、自力を頼みにする疑いのころが晴れていくこと、すなわち、信心をあらわす言葉である。「名」は、阿弥陀如来のみ名である。如来の誓いが衆生に呼びかけるために名となった名号である。「念我」というのは、誓いのみ名を憶念せよということである。このことを諸仏称名の悲願として表しているのである。憶念というのは、信心を獲得した人は疑いのころがないので、本願が常に思い起こされて絶えないことをいうのである。「総迎來」の「総」は、まとめてということ、すべて、みな、という意味である。「迎」は、むかえるということ、まちうけるという意味である。つまり、本願他力を表わしているのである。「来」は、かえるということ、こさせるという意味である。法性のみやこへ迎え導いて、来させ、帰らせるという。法性のみやこより、生きとし生けるものを救いとうと、この迷いの世界にくるから、「来」をきたるというのである。法性のさとりを聞くから、「来」をかけるというのである。

「聞く」ことは信心である。いずれにしても、「聞く」と「信心」が、すんなりと結びつくことはない。そこに省略されているであろうことをどのような言葉で補うのか、それが試訳のポイントとなった。

親鸞が言う「聞」とは、一般的に考えられている「聞」ではない。たとえば、多くの経典が「我聞如是(もしくは如是我聞)」から始まることはよく知られているが、伝統教学においては、「我聞」は聞成就、「如是」は信成就を表わしているとして二つに分けて考えられている。この耳慣れない、特に「聞成就」という言葉に注意せしめられる。

すなわち、親鸞の「聞」とは、教えを聞いても信心にならない、領けないという、そういう状況を潜った「聞」である。それは耳ではない、この身で聞くということ。それ故、親鸞においては、「聞」とは信心をあらわす御のりなのである。

(訳：親鸞仏教センター)

私の二冊

(常塚 聡)

『相対性理論』(岩波文庫)

A・アインシュタイン／内山龍雄訳・解説

肉体が食べたものによって造られてるよう

に、精神が読書の経験によって造られてるよう

にするならば、私の精神のかなり大きな部分で

の方向性はこの『相対性理論』を読むという経験に

よって形作られたといってもいいだろうと思う。

アインシュタインと「相対性理論」という名

前は、科学や物理学にさほど興味がない人でも

よく耳にするものだろう。しかし、その理論の

中身となると「難解」というイメージが先行し、

専門家でないものにはなかなか敷居が高い。

本書にはアインシュタインの「動いている物

体の電気力学」という論文と、それに対する訳

者の詳細な解説が収録されている。特殊相対性

理論の基礎をなすこの論文は、実はわずか十数

頁ほどの短いものである。とはいってもその決

定自然科学の専門教育を受けたわけではない私

にとつては決して簡単なものではなく、解説と

行きつ戻りつを繰り返しながら、文章の論理を

ひとつひとつ追ひ、ひとつひとつ計算を確かめ、

紙の上に図を書き、それまでになかった時間

をかけてこの短い論文を読んでいったのである。

読み進めて行くにつれ少しずつ私の目の前に

広がっていき新しい世界は実に刺激的だった。

アインシュタインの足取りを追いつつ私は、私

自分の手で「動いている時計は遅れる」という

ような常識とはかけ離れた特殊相対性理論の法

則を証明してゆき、そして最後にはかの「E=

mc²」という式を自分自身の手で明確に導き出

していたのである。その時私が見ていたもの

は、アインシュタインがたどり着いたのと同じ

景色であった。それは大げさに言えば、「私の

知らない世界がある、しかし世界を理解するこ

とは可能だ」ということを私が発見した瞬間で

もあった。

アインシュタインを読むという経験が私に伝

えたのは、世界そのものもつ美しさ、力強さ

であるといえるだろう。科学の目を通して見る

世界は無味乾燥であると感じていてる人に、この

本をじっくりとひととくことを勧めたい。

『聖典』の試訳（現代語化）

親鸞は常に、「信の一念」に立って仏道を語る。それは如来の回向によって恵まれる仏道である。しかし、一般的にイメージされるのは、時間経過のみならず空間的概念をも孕む、自助の精神に基づく仏道ではないだろうか。本文に沿って言うなら、「聞名念我」していればいすれ…と普通は考えてしまう。したがって、「法性のみやこ」も実体的とならざるを得ない。

「総迎來」の「迎」について親鸞は、「他力をあらわすところなり」と明言する。しかし、「来」に関しては「かえる」「きたらしむ」という二つの意味・異なる方向性を与えている。それが一つの謎であり、議論の中心となった。親鸞が「来」の文字から読み取ったのは、自らの宗教的救いの内実ではなかったか。如来回向の用らきによって「聞名念我」する衆生にどのようなことが起るのか、すなわち、迷いの世界から信心の世界へ帰すという意味内容を「来」の一字に見いだしたのではないだろうか。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳⑨

原文

「彼仏因中立弘誓 聞名念我総迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智与高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使回心多念仏 能令瓦礫變成金」（五会法事讃）。「彼仏因中立弘誓」、このころは、「彼」は、かのという。「仏」は、阿彌陀仏なり。「因中」は、法蔵菩薩ともうししときなり。「立弘誓」は、「立」は、たとという、なるという。「弘」は、ひろしという、ひろまるといふ。「誓」は、ちかいというなり。法蔵比丘、超世無上のちかいをおこして、ひろくひろめたまうともうすなり。超世は、よの仏の御ちかいにすぐれたまえりとなり。超は、こえたりというは、うえなしともうすなり。如来の、弘誓をおこしたまえるようは、この『唯信鈔』にくわしくあらわれたり。「聞名念我」というは、「聞」は、きくという。信心をあらわす御のりなり。「名」は、御なともうすなり。如来のちかいの名号な

現代語訳

「彼仏因中立弘誓 聞名念我総迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智与高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使回心多念仏 能令瓦礫變成金」（五会法事讃）。「彼仏因中立弘誓」という言葉の意味は次の通りである。「彼」とは、かのということである。「仏」とは、阿彌陀仏のことである。「因中」とは、阿彌陀仏に成る以前、法蔵菩薩と名告られていた時のことである。「立弘誓」とは、「立」は、たてるといふこと、また、なるということである。「弘」は、ひろいということ、また、ひろまるといふことである。「誓」は、ちかいということである。法蔵という求道者が、超世無上の誓いをおこして、広くひろめてくださるということである。超世とは、諸仏のお誓いよりも勝れているということである。超は、こえているということとであり、この上ないということである。阿彌陀

親鸞仏教センターの動き

（2009・11～2010・1）抄出

■2009年

11・13 親鸞聖人ご命日のつどい

第89回清沢満之研究会

第110回英訳「教行信証」研究会

第43回「唯信鈔文意」研究会

第29回（通算・第80回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）

第19回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

人事発令（内記洗心院研究員が発令）

情報誌「Eda」第18号、研究誌「現代と親鸞」第19号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第32号を発行。

「公開講演会2009」テーマ：「現代における人間形成と科学教育と宗教教育」

講題：「親鸞と教育と化身の大地」

氏、コメンテーター…NPO法人「場の研究所」所長・清水博氏・本多弘之

所長（東京国際フォーラム）

第111回英訳「教行信証」研究会

第90回清沢満之研究会

第20回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

第44回「唯信鈔文意」研究会

親鸞仏教センター報恩講

12・25

12・22

12・15

12・14

■2010年

第91回清沢満之研究会

親鸞聖人ご命日のつどい

第21回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

第30回（通算・第81回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）

第45回「唯信鈔文意」研究会

第112回英訳「教行信証」研究会

第5回研究員と読む公開輪読会「現代から「御文」を読む」①1/29②2/5③2/12④2/19（文京区・東京大学仏教会館）

1・29

1・26

1・19

1・8

1・7

1・29

1・26

1・19

1・8

1・7

● 現代の諸課題と対話する研究会報告② ●

宗教から見るアメリカ—「見えざる国教」と多文化主義（森孝一）

宗教者として社会の現実と向き合うとはどういうことか

—釜ヶ崎・野宿者支援を通じて見えてきたもの（本田哲郎）

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聡

現代の社会において親鸞思想^{とら}を捉え直していくためには、今の時代が抱えている課題に対し宗教が何を発信できるのかを絶えず問い直し、考え続けていくことが必要である。親鸞仏教センターでは、現代の課題と第一線で対決している方々との対話を通じて親鸞思想の立場からのメッセージを発信していくことを願い、「現代の諸課題と対話する研究会」を開催している。

今回は、2009年4月4日（講師・森孝一氏）および2009年10月16日（講師・本田哲郎氏）に開催された研究会の概要を報告する。

■ 森孝一氏との対話

第3回の研究会は、同志社大学一神教学際研究センター（京都市上京区）に同センター長の森孝一氏を訪問し、「宗教から見るアメリカ」をテーマとして開催された。

2008年に行われたアメリカ大統領選挙は、日本でも大きな注目を集めた。結果、民主党のバラク・オバマ氏が当選し、アフリカ系アメリカ人として初の大統領となった。その就任式は『聖書』に手を置いて宣誓をするという宗教的儀式のような形式で行われ、その後の演説でも「神」という言葉がたびたび用いられた。国際社会において非常に大きい存在感をもつアメリカという国家において、宗教はどのような存在なのであろうか。森氏との対話は、「アメリカにおける政教分離」「キリスト教原理主義の影響」「宗教の社会的役割」などをめぐって行われた。

森氏が指摘したのは、アメリカが移民によって成り立っている国家であるため、社会を統合するために「共通の未来」の姿を必要としているという点である。独立宣言に「全ての人間は創造主によって平等に創られている」とあるよ



森 孝一（もり こういち） 同志社大学神学部教授
1946年、広島県に生まれる。同志社大学大学院神学研究科修士課程、米国・パークレー神学大学院連合（Graduate Theological Union）博士課程終了。Th.D.（神学博士）。現在、同志社大学神学部教授、同大学一神教学際研究センター長。専門はアメリカ宗教史。著書に『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社選書メチエ）、『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身—アメリカ「超保守派」の世界観』（講談社文庫）、『アメリカと宗教』（編）など多数。

うに、その「共通の未来」は宗教的な言葉で表現されている。しかし、その「宗教」は特定の集団に属するものではなく、自由と民主主義の理想を「神」の名によって象徴するものであり、国家が特定の宗教団体に特別の地位を与えることはない。森氏は、そのような「共通の未来」の象徴としての宗教を「見えざる国教」と呼んでいる。

「見えざる国教」が自由、平等、人権といった言葉で示される理想を表現しているとすれば、それは排除ではなく共感と他者の尊重の原理として社会の中ではたらくことができる。森氏は、現在の宗教的原理主義や排外主義は、アメリカという国家が宗教的であるからというよりはむしろ、「共通の未来」を追い求めることを「待てない人々」によって生み出されたものであると指摘する。

原理主義やナショナリズムは、「待てない人々」の目の前に、すぐに手に入る解決策と

「敵」の姿を示してみせる。しかしそれは実のところ、真の問題から眼をそらせるものでしかない。宗教は「待つ」ことを励ます営みである。それはまた、人間の真の問題に立ち向かう力をもたらすはたらきでもあるといえよう。

※森孝一氏との研究会の詳細は、『現代と親鸞』第20号（2010年6月1日号）に掲載予定です。

■ 本田哲郎氏との対話

第4回は、2009年10月16日、社会福祉法人「ふるさとの家」（大阪市西成区）にフランシスコ会神父の本田哲郎氏を訪問し、「宗教者として社会の現実と向き合うとはどういうことか」というテーマのもとで行われた。

本田氏はカトリックの司祭であり、また『聖書』の個人訳を出版するなど聖書学者としても優れた業績を挙げている。またその一方で、大阪市・釜ヶ崎（西成区あいりん地区）の野宿生活者、失業者の自立支援活動にも取り組まれている。本田氏との対話は、「宗教と社会」「宗教者の社会的行動のあり方」「祈りと救い」などをめぐって行われた。

本田氏は、抑圧され苦しむ人々の現実の中で『聖書』を読み直すことで、現代のキリスト教が『聖書』の言葉に背いていることに気がついたという。本田氏によれば、『聖書』の基本となるメッセージは「神の力は、最も弱く小さくされたものを通してはたらく」ということである。その姿勢は、単純な「共生」という考え方とは異なる。一人ひとりの人間がそれぞれに違った存在であり、さまざまな立場や考え方があるのは当然のことであり、「違いを認める」というのは目標ではなく出発点に過ぎない。しかし、「共生」というとき、それによって現実にある差別や抑圧が隠されてしまうことがある。ただ「共生」ということで満足してしまうのではなく、抑圧され、弱い立場を強いられたものが現実にもどくようにして解放されてゆくかを考える必要がある。

そうであれば、宗教が社会の現実に対して働きかけるのは当然のことであろう。本田氏は、「祈りは行動を伴う」と言う。祈りとは、自分にはたらく神の力に信頼して行動を起こすことであり、単なる願望ではない。宗教の立場から社会に関わるということは、現実の中で抑圧されたものから神のはたらきを学び、信頼して歩



本田哲郎（ほんだ てつろう） フランシスコ会司祭
1942年、台湾台中市に生まれる。上智大学文学部哲学科卒、同神学部修士課程修了。ローマ教皇庁立聖書研究所を経て、フランシスコ会日本区管区長。1989年より大阪市西成区あいりん地区（釜ヶ崎）の社会福祉法人「ふるさとの家」にて日雇労働者、野宿生活者の支援活動に従事するかたわら、「小さくされた者」の立場からの聖書の読み直しを続けている。現在、特定非営利活動法人「釜ヶ崎支援機構」理事、「釜ヶ崎反失業連絡会」共同代表。著書に『釜ヶ崎と福音』（岩波書店）『小さくされた者の側に立つ神』（新世社）など多数。

みを起こすことであると本田氏は言う。

私たちは、自分の側が正しく、それ以外は間違っているという考え方をしばしばしてしまう。宗教者としては、真理は自分たちが占有しており、その真理を人々に与えていくのが宗教の役割であると考えやすい。しかし本田氏は、「神が一番弱いものとともにある」と言う。宗教の役割とは、自分たちのグループに人を引き入れることではなく、その人を抑圧から解放することである。「上から下へ」教えを伝えるという関わりではなく、抑圧されたものを通じて神のはたらきを学ぶという姿勢が必要とされる。ここに、親鸞が「御同朋・御同行」（『御文』一帖目第一通）と語ったことと共通するものを読むこともできるのではないだろうか。

親鸞が「とも同行」（『歎異抄』）と言い、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」（『唯信鈔文意』）であると言うのは、仏の光に照らされたときその「小さく、弱くされた」、「いし・かわら・つぶて」がそのままに黄金に転じられるという意味でもあろう。小さく、弱いものこそが最も尊い存在であり、そこにこそ真実があるという視点は、宗教のちがいを超え、現実の差別と闘うための重要な方法論となるのではないだろうか。

※本田哲郎氏との研究会の詳細は、『現代と親鸞』第21号（2010年12月1日号）に掲載予定です。

● 清沢満之研究会報告 ⑨ ●

「伝道者」から「求道者」へ

—清沢満之との関係における暁烏敏の転機—

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕

2009年9月29日、東京ガーデンパレス（東京都文京区）に、毎田仏教センター（米国カリフォルニア州バーレー市）所長の羽田信生先生をお招きして、「清沢満之研究会」を開催した。羽田先生には「『伝道者』から『求道者』へ～清沢満之との関係における暁烏敏の転機」という講題でお話しいただいた後、研究員との間で活発な議論・意見の交換が行われた。本稿ではその一部を紹介する。



■ 清沢満之と暁烏敏

暁烏敏という人は生涯、師・清沢満之の教えをいただき続けた人であるが、伝道者として生きた前半生での師の教えに対する理解と、求道者として生きた40歳以降の後半生の教えの理解の間には、かなりの違いがあったといえる。清沢晩年の教えが、一般に「精神主義」と呼ばれてきたことは周知の通りだが、極めて簡略化して言えば、自分の心のありように応じて世界も変わるということである。その場合、深い自覚を経験した人が、その自覚の内容を他の人たちと無意識的に分かち合うということは、十分に考えられる。ただし、そうした個人的な経験をもとに、他人を教え導くことができると考えるのは、一種のエリート意識に基づく伝道者根性であって、清沢自身、弟子たちがそうした態度を示すことを決してよしとはしなかった。にもかかわらず、清沢とともに過ごした前半生の暁烏の生き方は、伝道者そのものだったといっている。その意味で、前半生の暁烏の理解は、本質的に師の教えに背くものであったといえる。



羽田信生（はねだ のぶお） 毎田仏教センター所長
1946年、長野県に生まれる。1969年、東京外国語大学ロシア語学科卒業。大学4年生のとき、毎田周一師の著書を読み、仏教を学ぶようになる。1969年から1971年まで『毎田周一全集』刊行会の一員として、全集出版に携わる。1971年、渡米。シカゴ仏教会にて、久保瀬暁明師と斉藤暁紅師の下で学ぶ。1973年ウィスコンシン州立大学大学院仏教学科に入学。1979年にウィスコンシン州立大学よりPh.D.を取得。専門は仏教学。1979年、大谷大学非常勤講師、1981年シカゴ仏教教育センター講師、1984年、バーレー仏教大学院（IBS）学監兼主任教授。1987年、バーレー沼田仏教センター勤務。1997年バーレー毎田仏教センター所長。
著書、翻訳書に『Lectures on Shin Buddhism（広瀬果作品集）』（東本願寺出版部）、『December Fan（清沢満之作品集）』（東本願寺出版部）、『The Evil Person（毎田周一作品集）』、『Heard by Me（毎田周一作品集）』、『Dharma Breeze（羽田信生エッセイ集）』、『法蔵菩薩化してこそ』（明悠会）、『師より賜りたる尊い我』（大和仏教センター）、『「衆生」が転じて「諸仏」と成る』（具足舎）など多数。

■ 伝道者から求道者へ

暁烏は40歳前後に、最愛の妻を亡くすとか、自身の名声が徹底的に打ち砕かれるという経験をしている。それまでの生き方に一大転機が訪れるのは、この頃である。そこで彼は『大無量寿経』に出会い、いわゆる「法蔵魂」に触れることで、伝道者としての自己が決定的に粉碎され、徹底した求道者へと変わっていく。

この伝道者から求道者への展開というのは、暁烏のアミダ観の変化とも深く関わる問題でも

ある。阿弥陀仏は「化仏」としても、また「真仏」としても捉えることができるが、「化仏」というのは、救済者としての阿弥陀仏のことであり、そこには、救う者と救われる者といった二元の対立がある。そうした「化仏」の阿弥陀仏を中心に教えをいただいた場合、そこにはどうしても「念仏さえしておけば、罪惡深重の身のままで阿弥陀様が救ってくださる」といった発想が生じてきてしまう。

前半生の暁烏の伝道者としての態度は、どこから生まれてくるのか。それは、まず罪深い自分を、罪深い身のままに救いとおってくださる阿弥陀様の「恩寵」をありがたいと感じることから、さらには、そうした「恩寵」の味を知らない人々に、阿弥陀仏の慈悲のありがたみを説いていくことで、彼らを導いていこうとするところに生まれてくるのである。このとき、暁烏自身が、あたかも仏果を獲得した完全な修行者である阿弥陀仏のごとくに、人々を救済するような存在になっていくことになる。学生がいつのまにか教師になってしまうようなものであろう。

一方、「真仏」というのは、「無限の光」としての如来、名号としてあらわれた本尊であって、「化仏」のような人格的救済者のイメージをもつ仏ではない。「無量光」というのは、文字通り無限である。だから、その光、その智慧には終わりはなく、求道者の、願を立てて智慧をいただこうという修行の道にも終わりが無いということではなければならない。それゆえ、法蔵菩薩の願が成就したということは、因位の求道者が、本当の意味で因位を成就したということ、完全な願いになり切ったということにはほかならない。

『大無量寿経』で説かれる仏は、果位の救済者としての阿弥陀仏ではない。完全な因位に立つ阿弥陀仏である。暁烏がその後半生で伝道者としての自己が打ち砕かれ、求道者へと変わっていくのは、そうした、どこまでも因位に立つ阿弥陀仏に、清沢の姿勢を重ね合わせたからではなかったか。

■ 清沢満之の「否定」の意味

暁烏らが直接、師の薫陶を受けたのは10年ほどの短い間であったが、その間、暁烏ら弟子たちの何人かは、「清沢先生は真宗の本当のご信心を知られないから、何とか先生に本当のご信心を持たせてあげなければならない」と本気で考えていたようである。そこには、伝統的教学を根拠とする一種のプライドがあったと考えられる。ところが、アミダ仏観でも、念仏観でも、弟子たちが持ち出してくる伝統的な考え方を、教えに対する固定見を、清沢は徹底的に批判し、否定した。暁烏のもつセンチメンタルな阿弥陀信仰には、容赦なく理性の冷や水が浴びせられた。

前半生において、暁烏が清沢の教えの意味を理解しなかったのも当然であろう。暁烏が清沢が教える「精神主義」の本当の意味に気づくには、彼自身、非情な現実と直面させられるという実験を経る以外になかったのである。

ところで、注目すべきは暁烏が語ったとされる「わしは清沢先生の『精神界』に寄せられる文章を勝手に直したものだ」という言葉である。前半生の思想が、清沢が語ろうとした「精神主義」と本質的に相容れないものであるとするなら、われわれは「精神主義」の思想そのものを、あらためて検討し直す必要に迫られることは言うまでもない。以下の議論については、『現代と親鸞』第20号掲載の研究会報告に譲りたい。

※羽田信生氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第20号（2010年6月1日号）に掲載予定です。



「親鸞仏教センター公開講演会2009」を開催 (2009年12月11日)

親鸞仏教センターが、研究・交流活動をととして対話を重ねてきた「現代」の問題を、親鸞聖人の教えとの接点から考えようという一昨年から開催している「親鸞仏教センター公開講演会2009」が、今年も大谷大学(京都市)の後援のもと、東京国際フォーラム(東京都千代田区)のガラス棟7階にて開催された。

今回は、「現代における人間形成～科学教育と宗教教育～」をテーマに、広島大学名誉教授の松田正典氏(=写真上)を講師にお迎えして、「親鸞と教育～化身の大地～」と題してご講演をいただいた。次いで、コメンテーターとしてお招きした、東京大学名誉教授・NPO法人「場の研究所」所長の清水博氏、本多弘之所長を交えて意見交換がなされ、有識者やサラリーマン、学生など130名の参加者と共に、約3時間半にわたる熱気に満ちた時間となった。

講演のなかで、松田氏は、「先進国に共通する子どものさまざまな問題現象の原因に、全てをメリットかデメリットかというもののさしで計る『メリトクラシー』(メリットに支配された国家・社会)によって惹起された家庭教育の喪失の問題がある。この英国のマイケル・ヤングの造語は科学技術文明の本質を捉えており、科学技術の発展と経済的豊かさを求める人類は、これを捨てることは不可能である」と指摘され、「メリトクラシー」の反対語として、「アミタクラシー」(如来の本願を拠り所として生きる世界)という造語を提案された。さらに、メリトクラシーという表層文化とアミタクラシーという深層文化とは、背反と相補の関係にあり、人としての真実の存在構造がある。これは親鸞の国土観「化身土と真仏土」の今日の表現である」と語られた。

コメンテーターの清水氏は、「教育とは、知識やHOW TOでなく、人間の苦しみ悲しみ喜びとしっかりと向き合う向き合い方を教えることであり、今それが欠けている。私たちは人間社会のいろいろな価値観の中で生きている。社会のなかでこのほうがメリットがあると側面に身を置いているけれど、よくよく自分の心を探ねてみると、そういうものを越えた何かが自分の中にはたらいっていると気づく、私はそれを科学の言葉で語りたい。その中で宗教とのよい出会いがあるのではないかと考えている」と語られ、本多所長は「『教育は自己教育以外にない』と聞いたことがあるが、自分が自分を育てるという可能性はどこからいただけるか、それは自分を越えたような可能性の開けからいただく、そういうことが信じられると有限であることの悲しさ辛さ、つまり失敗があっても、そこに無限なる者からの可能性を信じて、そこから力をもらって生きていくことができる」と語った。

※講演記録は、『現代と親鸞』第21号(2010年12月1日号、1冊1,200円)に掲載予定です。



研究員と読む「公開輪読会」(3月)のお知らせ

■「精神主義」の思想を問い直す～「我信念」を中心に～(全4回)

日 時: 2010年2月26日(金)、3月5日(金)、12日(金)、19日(金)
いずれも午後6時30分～8時30分

担 当: 山本伸裕(やまもと のぶひろ)研究員

定 員: 35名

資 料 代: 500円(4回分)

■申し込みと問い合わせ

親鸞仏教センター公開輪読会2009 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏教会館2階ホール

(文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)

【御礼】

2月開催の「現代から『御文』を読む」(全4回、担当: 常塚聰研究員)につきまして、大勢の皆様のご参加をいただき、意義のある輪読会となりました。御礼申し上げます。

親鸞仏教センターの発行物を ご自宅にお届けします。

年会費1,000円(送料込)で、情報誌「アンジャリ」(年2回)と機関紙「親鸞仏教センター通信」(年4回)をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

申し込みと問い合わせは、親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係(TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901 E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp)まで。

会員
募集中!

●新スタッフの紹介

嘱託研究員 内 記 洸

1982年岐阜県生まれ。京都大学文学部(宗教学)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(宗教学)修了。

あ と が き

昨年、「臓器移植法」が改正され、脳死は人の死と定義された。本人が生前に書面で拒否の意思表示をしていない限り、親族の同意があれば臓器提供を行うことができるようになり、さらに書面で親族に臓器を優先的に提供することを意思表示できるような内容である。その後、新たに手元に届いた「健康保険証」には、自分の臓器を提供するか、しないかの意思表示を明示する欄があった。どちらも決めない場合、家族へ重苦しい選択を残すことになる。待たなしに追い詰められた感がある。臓器提供を待つ人がいる事実を無視できるか、大変重い課題である。人間に起こる事実として「受けとめること」であった「死」を、人間が「決めるもの」、「決めることができるもの」に変えてしまったことに強い違和感を覚える。正しい答えは何かと探している自分は、いつの間にか、生死、命を「もの」と見ている。改めて「脳死」「臓器移植」の問題を、他者の生と死という視点ではなく、私の生き様の問題として受けとめなおしたい(木曾)▼「現代と親鸞の研究會」では、森田療法研究所所長の北西氏にご出講いただいた。人間の苦悩に対して模索し探求され、実際の現場での取り組みから発せられる言葉に深く感銘を受けた。われわれがこの世に存在している以上、他者との関わりは切っても切れないものである。ある意味で、一人ひとりに現場が与えられているといえるのではないかと。仏法はどこかにあるのではなく、今ここにはたらいっている。真理には言葉はないのかもしれないが、人間は言葉によって救われると伝え聞いている。その言葉は、職場や家族、レストランでの一つひとつの会話に表れてしかるべきものではないだろうか。自分の生活のなかで仏法を聞く、ということあらためて考えさせられた。(大江)▼「人は人を愛したいんやあ」大学時代、授業に熱が入ってくるとそう言い続けた先生がいた。なんのこともやらさず事を言っているなと思っていた。しかし、最近お話を聞く中に、「自利利他円満」という言葉が出た時、ふとこの言葉と少しだけつながった。自分の思いを、相手を傷つけてでも押し通そうとするような私が、「共になんてありえない」と思いつつも「共に」と願ってしまう、そのことが、先生風になんか「愛したいんやあ」なのかもしれない。大学を卒業して、もうすぐ10年が経とうとする今、そうやってボロボロと言葉が浮き上がってくる。息師に「真宗は勉強しても分かんないが、勉強せんと分かんない」と謎かけのような事を言われ、意味不明だったことも併わせて思い出した。(鈴木)